臨床実践について～就学時期～

横浜市教育委員会事務局
学校教育企画部 特別支援教育相談課
（横浜市特別支援教育総合センター）
主任指導主事　竹田　智之

横浜市教育委員会事務局特別支援教育相談課
外部専門職派遣事業について

市立小・中・義務教育学校に在籍する肢体不自由児童・生徒の状態像の多様化により、高度な専門性を要するケースの増加がみられます。

そこで、**特別支援学校センター的機能（以下、「センター的機能」という。）による学校支援での対応の充実に向け、外部機関の専門職を派遣します。**

【従事内容】
◆肢体不自由児が在籍する小・中・義務教育学校に、特別支援学校センター的機能担当教員と同行し、姿勢づくりや運動面などのアドバイス、必要に応じて可能な範囲での環境調整の支援を行います。
◆令和3年度よりモデルケースによる試行。令和5年度より全市展開。
【事前研修等】
◆推薦された理学療法士に対して、特別支援教育相談課において事前研修を実施します。（座学で半日程度）。また、試行期間は担当指導主事による同行実地研修も行います。
【派遣回数】
◆理学療法士1人における派遣回数については、事前研修時に相談の上で調整

横浜市教育委員会事務局特別支援教育相談課
外部専門職派遣事業について

主な相談主訴

・休み時間中や個別課題における活動内容で、体幹を鍛える取組について知りたい
・片麻痺ケース、運動機能を踏まえた支援や環境調整について
・手指の巧緻性向上に向けた支援
・姿勢保持について、自己刺激行動と座学時間の折り合いをどうつけたら良いか
・個別課題や自立活動でどんな身体の動きを取り入れたら良いか。姿勢保持のための補助具についても知りたい。
・車いすの児童。体育の参加の仕方について。一般学級において他児との違いが大きくなり、本人の気持ちの部分も含めた支援
・摂食や運動指導について
・書字の際の手首のサポート方法について
・姿勢の崩れや転倒、ふらつきが日常的である。学校で出来る配慮について知りたい

対応の実際

ケース例（架空の事例です）

【学校からの主訴より】

・身体のぐにゃっとしていて、授業や給食では背中が丸くなってしまう。
　設定を変えたほうが良いか。

・歩行時のペタペタとガニ股で歩くが、このままでよいのか。

・書字を含め、動作が全体的にゆったりとしていて、授業のスピード感についていけていない。どういった工夫が可能か。

・外部専門職として関わる場合、どのようなアドバイスをすると良いか？

対応の実際

ケース例（架空の事例です）

【学校からの主訴より】

・身体のぐにゃっとしていて、授業や給食では背中が丸くなってしまう。
　設定を変えたほうが良いか。
・歩行時のペタペタとガニ股で歩くが、このままでよいのか。
・書字を含め、動作が全体的にゆったりとしていて、授業のスピード感についていけていない。どういった工夫が可能か。

・「全体的な低緊張さをどう補うか」と「目標設定をどこに置くか」がポイント。
・運動や学校生活での困難があるのか、想定されるのかを明確に。
・本人に改善してもらうということが難しい場合の対応
　→たくさんの成功体験や経験そのものを積んでいくのが重要。
・予後予測についての共有
　→肘や膝のロッキングによる脱臼リスクや、偏平足、側弯などの身体のトラブルについて情報提供し、学校で必要かつ可能なリスク管理および経過観察へ。

対応の実際

ケース例（架空の事例です）

【学校からの主訴より】

・軽度知的障害、それ以外の情報なし、特別支援学級学級在籍、５年生
・身体がぐにゃぐにゃしている。姿勢が保てない。
・毎朝クラスでトレーニングをしているが、効果がわからない。
・集中が続かず、落ち着きがない。
・体育でどんなことに取り組めばよいか？

Q.外部専門職として関わる場合、どんな視点や切り口でアドバイスする？

対応の実際

ケース例（架空の事例です）

【学校からの主訴より】

・身体面の大きな問題はなく、他者の頬をつねるなどの問題行動がある。

→学校では軍手をするといった対策をしているが、なぜその行動をしてしまうのか知りたい。

Q.外部専門職として関わる場合、どんな視点や切り口でアドバイスする？

対応の実際

ケース例（架空の事例です）

【学校からの主訴より】

・身体面の大きな問題はなく、他者の頬をつねるなどの問題行動がある。

→学校では軍手をするといった対策をしているが、なぜその行動をしてしまうのか知りたい。

・原因をはっきりさせるのは難しいが、例えば学級でのコミュニケーションでストレスを感じている可能性や、自身の痛覚鈍麻による不快が共感しにくい可能性など考えられる。

・禁止させるのではなく一定の感覚欲求は満たしつつ代替手段を検討する

学校との関わりに向けて

■「自立活動」を支えていく、という視点がポイント

■学校における教科等に関する学びやそれぞれが目指す自立に繋げていくための取り組みに対するアドバイスが、学校教育の中でより効果的に活かされやすい。

■ライフステージの中で、学校で過ごす期間の間に何を学び、何を経験できるかということを教員と共有し、アドバイスに際しては、「自立活動は学校教育の場で行われる」「教員が立てる個別の指導計画に基づいて行われる」ということを、意識しておくことが大切。

■一般学級在籍の場合や、自立活動とは直接関連しない場合も、【学校という枠組みの中で、自分自身はどういう位置づけや役割で関わりをもっているのか】を十分に意識し、【学校自体の役割を理解した上で、本人の学びやすさや暮らしやすさにつながる】アドバイスであると効果的である

学校との関わりに向けて

■その上で、専門職は児童生徒の実態把握（特に、教員が気づきにくい児童生徒の困難さや得意なことの背景、根拠の部分）に対する情報提供やアドバイスを行えることが強み。

■具体的な取り組み（訓練内容や、装具の着用等）関するアドバイスについては「やり方」だけではなく、必ず「目的」「意図」「禁忌」「安全上の配慮」を教員および保護者と共有することが重要。